

阮籍と情況

——伏羲との往返書簡——

大上正美

一 考察の目的

阮籍（一一〇—一六三）の文學を考えるときの基點となる現實の情況との緊張を孕んだ關係については、傳記資料の多くの挿話によつて政治權力との關わりを外側から見ることができる。あるいはまた、「詠懷詩」をはじめとして彼の作品に内在するものとして阮籍の内側からもうかがい知れる。今ここに試みようとするのはそれらとは異なる資料によつて、阮籍を攻撃する側の論理と内面、それに應對する阮籍の論理と内面、その兩面から阮籍のおかれていた情況のまことにスリリングな實態を明らかにすることである。つまり、伏羲と阮籍との間で交わされた往返書簡が現存することに注目し、それを資料として、兩者それぞれの言葉と論理の中にそれを見ようとする試みである。

一 伏羲の阮籍糾弾の論理とレトリック

阮籍のもとに届けられた伏羲の「與阮籍書」と、それに答えた阮籍の「答伏羲書」の往返書簡が現在殘つてゐる。明・梅鼎祚纂輯・李右謙參定『三國文紀』魏文紀卷十八や、清・嚴可均校輯『全三國文』卷五十三（作「與阮嗣宗書」）・卷四十五（作「答伏羲書」）に、それぞれ二書そろつて收錄されているのがそれである。⁽¹⁾

二種のテキストはともに、伏羲、字は公表と注記する。魏末、琅邪東武の伏氏が名を知られており、おそらくそれに繋がるものであろうが、鄉⁽²⁾

實に關してそれ以上のことは分からぬ。また、このときの伏羲の官名は何か、そもそも官に就いていたかどうかも分からぬ。後に述べるが、「與阮籍書」の發言から見ても官僚豫備軍のようなところがあり、手紙を書いた時點では官職に就いていなかつたのではないかと思われる。阮籍その人との關係についても、書中に「驟かに（あなたを）論する者の洋溢の聲を聽くとき、（あなたとわたしとは）未だ蓋を傾けずと雖も、其の情は舊の如し」と見え、關心（親近感というよりも、敵對關係にある者としての關心などはあるが）を前々から持つてはいたが、面識があつたわけでもない。また一方の阮籍の返書中にも兩者の日頃の私的關係を暗示するものはない。伏羲は阮籍批判を展開した書の最後に「庶はくは（わたしのこの忠告が）弟子の一隅に存するに足らんことを」と言つてはいるが、ことさらへりくだった伏羲の嫌みたっぷりな言葉の奥に、年下でまだ無名の士の、これを機にした名士との今後の關係を期待するような口吻も感じられるのである。

伏羲は時代に存在する大きな個性たる阮籍に對して公の手紙を書くことによつて、體制内での積極的な處世を強いる。それは私的な親しい關係から發せられた阮籍の生の危機を憂え心配する助言なのではなく、公の攻撃の意圖を持った論争だと見なさなければなるまい。まずこの章では、體制内で反禮教的態度をとる存在への糾弾がどのようなものであるか、主として出仕處世の主張の論理はどの邊にあるか、及びその場合の立論の仕方はどのようかを確認しておこう。その後次章で、その論理自體を成立させておる根據となるどのような認識を伏羲が持つてはいたかについて見ることにしよう。

「與阮籍書」では、世の中に積極的に出て生きていこうとする伏羲の處世認識——名利の生をこそ目指すべきであることが主張され、それにひきかえ阮籍の生き方は名利を求める生とはおよそかけ離れていて、實に危うくたよりないので黙つておれない、そこで阮籍のためを思つてその曖昧な處世態度を改めるように忠告してやろうとしてこの手紙を書いたのだ、というのである。

大要是右のようにつきさりとした論の展開のように見えるが、實際は分量も多いし、また論旨を展開するものの言い方もたいそう持つて回つたもので、意匠が存分にほどこされた執拗な論述になつてゐる。そしてその意匠と執拗さの中にこそこの書の眞意が隠されてゐるのである。冒頭の文から見てみよう。

蓋聞——建功立勳者、必以聖賢爲本——
樂眞養性者、必以榮名爲主——
若——棄聖背賢、必不離乎狂狷、
——凌榮起名、則不免乎窮辱。

(さて、功績を擧げ勳績を立てる者は、必ず聖賢を大本とみなし、一方眞を樂しみ生を養う者は、必ず榮名を第一とする、と聞いています。ですからもしも聖賢に背くような生き方をすれば、必ず狂狷の人になってしまい、また榮名を過度に貪る生き方をすれば、窮屈の状態を免れないのであります。)

對偶表現を用いて、聖賢と榮名とを求める處世を對比してい。そしてそれがうまくいかない場合、ともに狂狷または窮屈の苦境に陥るのだと言つて、兩者の慘めな生のありようを提示している。續けて四字句を重ねた散句で、人の赴くところは總て一つの生き方しかないと言う。

故自生民以來、同此圖例、雖歷百代、業不易綱。譬如大道、徒以奔趨遲疾、定其鷺良、舉足向路、總趨一也。

(もともと生民以來、この圖式は同じで、百代を経たとしても、このことの大綱は變わらないのです。これを大道を行くのにたとえると、ただ走る速さの遅いか速いかということでその馬の善し悪しを決めるだけであつて、遅速の差があろうとも馬が足を上げて道に向かうということに關しては、いずれの場合も赴き向かうのは一つの道なのです。)

ではその赴く一つの生き方とは何か。しかしそれはすぐ續けて提示されるわけではなく、次にも否定的に一項對立が用意されている。

然——流名震響、非實不著、而抱實之奇、非人不寶——是使——薄於實而爭名者、或因飭虛以自矜——貴德保身、非禮不成、(而)伏禮之矩、非勤不辨——慎於禮而莫持者、或因倨怠以自外——

其自外也、必排摧禮俗以見其不羈之達。

(しかしながら、名聲をとどらかせようとしても、實質がなければ世に著れず、しかも、實質を具えた奇特さも、それにふさわしい人物でなければ評價されません。また一方、德を貴び身を保とうとしても、禮に依らなければ達成されず、しかも、禮に則る正しさは、急げずに勤めなければ辨識されません。このことが、實質を軽んじて名ばかりを争う者に、虚飾によつて自ら誇るようさせたり、また禮に慎みながらも持続できない者に、驕り怠けて自ら禮を遠ざけるようにさせたりするのです。その自ら誇る虚名の者は、必ず曖昧なものを閉じこめては大きな度量を誇示しようとして、またその自ら禮を遠ざける反禮の者は、必ず禮俗を馬鹿にして勝手な自由を示そうとするものなのです。)

一項の前者は虚名の者を、後者は反禮の者をいう。ここでも對比して提示した上で、そのいずれの場合もうまくいかないことを言う。なぜそれが強調されるのか。虚名や反禮の生の誤りを解消するもの、あるべき生として赴くところ一なるものがここでも待ち望まれるからにほかならぬ。しかしここでもまだ明かされず、次に贊否兩論ある世間の阮籍評價を問題にする。

——或謂吾子英才秀發、邈與世玄、而經緯之氣有寢缺矣——

——善子者、欲斤斬以拒口樸、
或謂吾子智不出凡、器無閼奧、而陶變以眩流俗——

惡子者、欲抽鍵以驚空虛。

(あなたは英才優秀で、はるかに世間の人よりも深いけれど、世を治める力量に缺けるところがあると言う者もいれば、あなたの智力は平凡でしかなく、その器量も深くはないのに、巧みにだまして世俗をくらましていると言う者もいます。このようにあなたを評價する者はあなたの生地を拒んでまで飾ろうとし、あなたを憎む者は存分に批判の言葉を浴びせようとしています。)

一項の前者では阮籍を認める者、後者では認めない者をあげながら、しかし前者では才はあるが「經緯の氣」に缺けるといい、後者の「陶變して流俗を眩ます」ということに對應させる。このようにつまりは褒める者とけなす者と二項對立がここでももあ出され、しかも褒める者も阮籍の存在の根底にある大きな缺點を指摘せざるを得ないのである。それだからあなたのためを思つてその生き方を探つてやろうと、

欲爲吾子廣推奧異、端求所安也。

(あなたのためには廣く奥深いすぐれた道を推し量り、あなたが安心して生きていけるような道を求めてあげようと思うのです。)

と言ふ。

そしていよいよ本題にはいる。「蓋^{けだ}自し生民の性氣を受くる源にして、好惡の大歸は相遠ざかるを得ず」と言つておいて、

君子徇名而不顧、亦有慕名以爲顯。夫名利者——總人之綱——

——集衡之門也——出此有爲、於義未聞。

(君子は名を求めるだけ、世に受け入れられるかどうかを顧みない者ですし、また名を慕つて結果として世に名を顯す者です。そもそも名利といふものは、人を總括する大綱であつて、すべての道を集める門なのです。この名利といふものを外れて何かことを成し遂げたなどといふことは、今までに聞いたことはありません。)

ここでようやく隠されていた主張の眞意が直接に傳えられたのだ。冒頭の段落で「總て趨くことは一なり」といった發言から、ここまでずっと隠されてきたのだったが、はじめてここで露骨に正面から言う。名利を求める生こそがよい、それ以外の生はないのだ、と。

そのことをはつきりさせた後は、次に念を押すように阮籍の間違った生を攻撃するのであるが、ここでもはじめは二項對立のそれぞれに生の可能性を認めるかのように言ふ。

吾子——若欲逆取順守、及時行志、則嘗矜而莫疑、以速民望。

——若欲娛情養神、不厚於俗、則嘗浩然恣意、惟樂是治。

(あなたがもし時として武、時として文によって、時をのがさず志を實行しようと思うなら、他人に誇るようなことがあっても疑われることなく、人望が得られるはずです。またそれとは違つてももしも情を樂しみ精神を養い、世俗との關係をあまり密接にしないようにと願うのであれば、浩然の氣をもつて氣ままに過ごし、樂しみの日々を送るはずです。)

しかしそうに續けて、あなたの現實はその兩方に涉つてだめだと決めつけるのである。

今——觀其規時、則——行己無立德之身
——察其樂、則——報門無慕業之客
——食無方丈之肴
——室無傾城之色
——徒泄泄以——徒泄泄以——疑世爲奇
——縱體爲逸——執此不回、既以怪矣。

(しかし今あなたが時をのがしていかを見ると、立德に心がけた生き方をしているとは思えず、あなたの業績を慕つて訪ねてくる客人もいません。また、あなたが樂しみの毎日を過ごしているかどうかを察するところ、食事は方丈の肴もないほど質素で、部屋には傾城の美人もいません。それでながらあなたは、いたずらに多言しては世を疑うのをすぐれたことだと思い、欲しままにふるまつては自由だと思い、このような生き方にこだわつて改めようとしない、これはもういけないことです。)

このように今まで見てきたところだけでも、伏羲の立論にはまず發想のはじめにたえず對偶表現を重ねた「項對立の處世を提示する」という特色があるのが見て取れる。しかも、はじめは一項對立的に相對的な生の可能性を提示するかに見えたが、しかしすぐにそのいづれも「名利」を求める生を逸脱した場合は成立しないと切つて捨てる。つまりは、一義的な生、絶對的な生しか認めていないのである。したがつて一貫する論理展開は、その二元論的發想を終始建て前として裝つて來たにすぎないのである。相對的な生の不可能を強調するために二元論的發想を對偶表現で裝つていたというわけである。

それは冒頭で處世認識を提示するときにも、また阮籍を攻撃するときにも、その論の立て方とレトリックとして有效に使われていた。一項對立的に示された生の、その兩方にわたつて、阮籍は踏み外しているとする。ここでも阮籍の現實の生を全面否定するために問題の立て方として二元論的な發想を裝つて來たことが分かる。その裝いの奥には頑固な信念、絶對的な價値觀が忍ばれていたのであり、搦め手から執拗に攻める論の

展開のなかほどで「元的な生の姿しかないことがようやく明示された。總て赴くところは名利だとするのである。その場合二項對立的に述べられたところでは對偶表現を次々に重ね、そして直接的に自己の主張をぶつけるところでは引用したように散句で強辯する。ここにも顯著な立論と敍述のレトリックがある」⁽³⁾のである。

さらにそのレトリックは二元論的發想そのものの中に根ざしていた思想の脆弱さをも隠す働きをしていたのである。もう一度冒頭の一文に戻る。

〔a 建功立勳者、必以聖賢爲本、
〔b 樂眞養性者、必以榮名爲主。〕

第一段落では、aの功勳を建立する儒家的生と、bの眞性を樂しみ養う老莊的生がともに認められているかのように提示されるのだが、二項それぞれの思想の水準の低劣さははじめから露呈されている。とりわけbにあつては、「一見「樂眞養生」の生に對しても伏羲が理解を示すかに見えながら、「榮名を以て主と爲す」とあるように榮名を第一に持ち出している。しかし「榮名は己が寶に非ず」(「詠懷」その四十一)などの發言を擧げるまでもなく、阮籍にとってはまことに低次元の理想でしかないものであつたはずである。また、aの物言いにしても體法の士の示す儒家の君子像の水準・程度を示すものでしかない。つまり阮籍への具體的な批判となるとまではや思想とは言えない、實に低次元の處世認識でしかないことを最初から露呈してしまつていたのである。また、「其の樂しみを察すれば、則ち食に方丈の肴無く、室に傾城の色無し」ともあつたが、この低劣な理想生活の提示は伏羲の思想の實際が立論の裝いと混つた文章それ自體の中にしかないことを端的に示していく、そこで述べられる論や主張は「達莊論」に登場する「縉紳好事の徒」「雄桀なるもの」や、「大人先生傳」で君子を標榜する「或ひと」のそれなりにすつきりとした體制側の論理(もちろん阮籍によつて假構されたものである)に比べても低劣である。しかし低劣である分執拗なからみなのであり、粘つこい論の展開なのである。そこにあつて、量的に長文であること、對偶表現の多用と論の裝いがその效力を發揮しているのは見てきた通りである。

三 時代認識の押しつけ

では、以上見てきたような阮籍彈劾の論理とレトリックの出發にある、伏羲の發想の根據となるのはなにか。この現實を肯定し、そこでの名利を追求する以外の生を認めない頑固な主張の大前提にあるのは、伏羲の時代認識・情況認識であると思われる。さらに注目すべきは、この時代認

識をまとめて阮籍にぶつけ、押しつけていることである。時代の聲を代辯し、權力者の聲を代辯し、體制側の論理を押しつけるもので、傳記資料にしばしば登場して阮籍を攻撃する禮法の士の強制する大義名分と何らかわりがない。

前に引用したように「未だ蓋を傾げずと雖も、其の情は舊の如し」と言つたり、また阮籍を批判するのは「張儀の志は、劫かざるるに激す、季路の晩き悟りは、滯りて滿を持するに在り。是を以て言を盡くすを嫌はず、其の良苦を究むれば、想ふに必ず勃然として、聲を承けて響き發せん」と發憤を期待しての故なのだという。しかし、「此れを以て之に備ふれば（あなたのような生き方をしてはいるが）、殆ど攻め害なはるかと恐る。其の至るや日無く、安坐保ち難し」とまで言うところから明らかに、批判を超えて強烈な脅しをしているのにほかならない。同時に、「吾子の爲に廣く奥異を推し、安んざる所を端求せんと欲するなり」と言つては、あなたのためを思つて言うのだと表明するのだが、それは善意の押しつけ以外の何ものでもない。その根底には、阮籍の不可解で傍若無人な言動に對して「異物の亂す所にして、之をして然ら使むるなり」とまで發言する不快感がある。このように脅したり、輕蔑したりしながら、同時に表面上は近親の言葉を述べたり、發憤を促すかのように言うのだが、本當のところは處世態度が曖昧な阮籍に對して司馬昭體制推進派に同調する態度表明を強いる厳しい問い合わせである。最後に「幸はくは以て（なんぢの）志す所を端し示されよ」と迫つてゐるのである。

しかもそれは低次元の處世觀でしかなく、論理として思想として一笑に付されてしまふべきなのではあるが、しかし権力をバックにした堂々たる論理、断言的論述であるために、その分一段と強烈にはたらく建て前なのであり、今の盛んなる「世を疑ふ」ものに對する恫喝をその下に隠していた。後半で次のようにいふ。

方今大魏興隆、皇衢清微、臺府之門、割石索寶。以吳蜀二虜、巢窟未破、長籌之士、所當奮力、可謂器與運會、不卜而行、今其時矣。

(今や大魏の王朝は盛んで、皇衛は清らかにして廣く、臺府の門では石を割き寶である人材を求めています。吳と蜀との二虜のため、その地はまだ打ち破れないことを考えますと、長籌の士こそが出て、まさに力を大いに奮うべきであります。その意味でも才能と運とが巡り合える絶好の機なので迷わず突き進むべきで、今こそその時なのです。)

阮籍に何曾がいった「今や忠賢のひと政を執り、名と實とを綜核す」や、鍾會が「今 皇道開明にして、四海風靡す。邊鄙に詭隨の民無く、街巷に異口の議無し」と荀康を攻撃したのに近い押しつけの時代認識である。このとき、伏羲が皇衢だけでなく、臺府の門での人材を言つて いるところに注意する必要がある。臺府はここでは大將軍司馬昭の幕府をいうので、禪讓をある程度見越した情況であるに違いない。伏羲の手紙がいつ書

かれたものであるかは分からぬが、吳蜀の「虜征討がせかれる」情況で書かれたとするなら、諸葛誕の亂鎮壓直後あたりから蜀征討を準備する數年間の情況下で書かれたものと思われる。大魏の盛んなるを喜び、それを支える大將軍を贊美する構圖は、諸葛誕の亂の鎮壓によつて武力抵抗が終結し、後は禪讓のための輿論作りがはじまり、司馬昭に九錫の詔が下されるようになつた段階にあつては常套的なものであつた。常に權力の中権から風景として視られる存在であることを強いられ、その曖昧な處世を糾撻している阮籍に「長籌の士」の役割になえ、などとまことに期待して言うはずはなく、こういう世の中の體制そのものに積極的に關われないものを決して許はしないのだとここでも警告しているのである。⁽⁵⁾ この「長籌の士」には、毌丘儉や諸葛誕の亂鎮壓の際に司馬氏の腹心として籌策に長けた傅嘏や鍾會が強くイメージされているのであるが、同や東方朔などの「達者」に對しての嫌惡を語る箇所で、

凡此數者、尙皆奇才異畧、命世崛起。徒以時昏亂、寶沉幽夜、而性放蕩不一、委致國寶之責。庶其不然。

（およそこのような達者と稱する者たちは、それでも奇才にして異畧の持ち主で、世に目立つ存在です。そうでありながら、いたずらに時俗が混亂しているとみなし、それを口實にして寶とも言うべき資質を隠し沈ませ、いつも好き放題にあるまい、國寶とも言うべき存在を萎え凋ませてしまふ責任があります。どうかあなた、そのような存在でないようにしてください。）

と阮籍に忠告する。ここで「國寶」というのは當代に當てはめれば司馬昭のことを指すのであらう。この箇所以前にも次のように言う。
設使至寶咸在子身、疑於國寶、爲不得行。

——天官雖博、無偏駁之任、
——王道雖寬、無縱逸之流。

（假に至寶がことごとくあなたの身にあつたとしても、國寶とも言うべき存在に疑われたならば、好き勝手なふうに行動できるはずもないのですよ。いくら廣く人材が求められるといつても、偏つていて純一でない役人など認められず、いくら世が平和で寛容だといつても、勝手氣ままな連中などいらないのです。）

また終わり近くでは世に出ても德と才なく、隠者としても失格だし、貨殖の利もなく、神仙の術ももたないとして、歴史上の人物からは遠く及

ばないと次々と並べた上で、「吾子の歸する所を總論するに、義の出づる所無し」と阮籍の存在を全面否定する。そしてその後に「然るに衆論雲の」とく擾れ、僕大異を稱す」といつて、阮籍を「大異」と一日おく阮籍理解者の存在に觸れているが、言論統制のまつただ中でそのような者たちが確かに一方にいることに對する危機意識がのぞいてしまう。「吾子の志は遁世に非ざるも、世適く所無し」というだけにとどまらない阮籍の影響力を見逃せないから、體制がよつてたかって阮籍の存在を危險視するわけなのである。したがつて公に阮籍に對して攻擊を仕掛けるのは、阮籍一人を攻擊しているにとどまらず、阮籍の存在を理解する知識人一般への見せつけのためなのである。伏義の公開質問状は阮籍への個人的な反撥にして同時に、體制維持者たちの覺めた知識人一般へのイデオロギーの押しつけであったと言うべきである。

伏義は、時代全體が司馬昭を持ち上げる體制に乗つて諂う者で、「壯士」「桀士」たらんとする體制豫備軍にほかならず、おそらくこのよだな存在は多かつたと思われる。司馬昭という權力の中枢、その側近者たち、とりまく禮法の士たち、さらにその周りには彼らに近づき諂い出世をはかる伏義たちのような存在がいた。彼らに加えて無力な良識派高官や多くの體制順應者たちを含むこれら權力の重層構造を構成する者たちすべてが體制を支え、輿論を盛り上げ、禪讓を推進しようとはかっていたのである。そこに體制の底の深さ、大きさ、恐ろしさがある。伏義たちは小ものであるだけに、餘計にその小ものからの攻擊の背後に大きく存在する體制の厚ばつたい重層構造が見えてしまるのである。

前章とこの章で見た伏義の「與阮籍書」の特色を次のようにまとめることができるだろう。

I そもそも伏義の二元論的發想の中に、すでに立論の詐術があった。中ほどでようやく伏義の主張する世を生きる生き方が示されるのであるが、二元的發想は名利を求める一元的生を絶對化するためのものであった。つまり、二元論的に提示して相對的な生の可能性を認めていいるかのように假裝しながら、それを認めることは決してなく、その分だけ強烈に一元的生・絶對的生を強いるためのレトリックにほかならなかった。また同じく二元論的裝いを呈しつつ、その雙方において踏み外すことになる阮籍の生をまことにざさまなものでしかないと糾撻する構圖になっている。そこに美文の攻擊性・有效性もあつたのである。

II 二項それぞれの生を求める、その思想に對する理解のいい加減さ、低劣さが見えてしまう。ここにも押しつけの、爲にする設定があるのであるがつて思想として問題にすべきものは何もなく、論的裝いとして名利を求める處世認識を阮籍に強いるばかりであったということになる。

III 今はとても良い時代なのだから、積極的に世に出て活躍しなければならない、とする禮法の士の時代認識・情況認識が大前提としてあつた。

IV 阮籍に對して親しみと脅しとをまぜながら、時代認識と體制を維持する思想を押しつける、輿論を意識した公開質問状であつたといつてもよ

い。

一六

四 返書に見る阮籍の「白眼」と「至慎」

伏羲の書簡を受け取った阮籍が、これもまたどのような時期に返書を書いたか分からぬ。返書の末尾で「比^ひる連^{れん}りに疹^し瘡^うあり、力^ぢめて^さ諭^ささんも（こ^ことば）多からず」と病氣がちだという。しかしそれにしても一六六一字にも及ぶ長文の書簡を送りつけてきた伏羲に對し、その分量にして三分の一にも満たない四八三字の返事であった。文字通り體力の衰えも事實であつたろうが、それ以上にこれはやはり、このときの不穏な情況、この返書の内容、論の立て方、彼の氣分と大いに關係していると考えた方がよいと思われる。阮籍の返書の大要をまず確かめておこう。

「承音覽旨、有心翰跡。」（お手紙拜見しました。思うところを書いてみます。）と述べはじめた最初から、比喩を用いて、小さな存在は大きな存在を推し量ることができないことを言ふ。

夫——九^く蒼^あ之^の高^{たか}、迅^{じん}羽^は不^ふ能^{のう}尋^さ其^{その}巔^み——矧^し無^む毛^の分^{ぶん}、所能^{のう}論^る哉^哉。

——四溟^よ之^の深^{ふか}、幽^{ゆう}鱗^{りん}不^ふ能^{のう}測^{そく}其^{その}底^{そこ}——矧^し無^む毛^の分^{ぶん}、所能^{のう}論^る哉^哉。

（そもそもどんなに高く飛ぶことができる鳥でも大空の頂を尋ねあてる」とはできません。どんなに深く泳ぐことができる魚でも大海の底をおし測ることはできません。ましてや鳥や魚でないものが大空の高さや大海の深さについてとやかく言うことができましょうか。）

それらの高く深きものは次元を異にする。續けてここでも比喩を用いて、「玄雲」も「鷹龍」も、その自在さを「瞽夫」や「璞蟲」には理解できないと述べた後で、次のように第一段落を結ぶ。

然則——弘^{ひろ}修^{しゆ}淵^{えん}邈^{えい}者^{しやく}、非^ひ近^{ちか}力^{ぢから}所^し能^{のう}究^く矣^い——何^{なん}吾^ご子^し之^の區^く區^く、而^は吾^ご眞^{しん}之^の務^む求^め乎^う。

（このようですから、廣く長く深く遠いものについては、近視眼的で無能の者には究めることができません。また神靈の變化するものについては、器量の小さい者には察することができます。どうしてあなたの狭い心で私の理想とする眞の境地を求めることができましょうか。）

我が眞とするものを君の心で推し量ることはできないという。莊子的發想で自己の大きさに對して、相手の小ささを強調して痛快に言い切る。このように比喩を用いることによって大きく發想し、阮籍は自己の主張を存分に通しているのである。

しかしながら相手の存在を根こそぎ抹殺するわけではない。なぜならすぐ續けての第二段では、存在するものの價値は相對的で、それぞれが好みにしたがつて楽しんでいるのだというからである。

人力勢不能齊、好尚舛異

鸕鳩凌雲漢以舞翼

螭浮八瀆以濯鱗

鳩鳩悅蓬林以翱翔
龍娛行潦而羣逝
斯用情各從其好、以取樂焉。據此非彼、胡可齊乎。

(人の能力はその勢いが平等だとは言えないし、好みも人それぞれ違うものです。鸕鳩のよくなすぐれた鳥は天の河をわたつて翼を振るい、それに對して鳩鳩のような小さな鳥は蓬の林を喜んで飛びめぐっています。また螭は八方の海に浮かんで鱗を洗い、それに對して龍は小川の流れを楽しんでは群をなして行きます。これらはそれぞれ自分の感情の好むところに従がつて樂しみを得ているのです。ですから自分の好みで相手の生き方を否定するのは間違つてゐるのです。)

「鸕鳩」などの大きな存在も、「鳩鳩」などの小さな存在も能力の問題だし、好尚の問題だというのである。自己の主體を貫きながらも、それぞれの主體にとってその生の價値は相對的であることを強調し、君は君、私は私だということになるのである。

第三段では自分が價値をおく天地の外に精神を遊ばせる生き方を言う。「徒形軀を斯の域（方内）に寄するのみ」であり、精神はどこまでも自由だとするのである。だから世間で無聞無稱でもいっこうにかまわず、伏義の批判は當たらないのだとする。

最後はまた伏義批判を展開する。

觀吾子之趣、欲
街傾城之金

求百錢之售
凝膚寸之檢
守牒穢以自畢。

(今あなたの目指すところを考えますと、傾城の金を求める、百錢の利益を求める、そうして天に至る禮を修め、狹い決まり事に照らして考えようとなさつていらつしゃる。その結果、大事な體を無理してまで物に使われ、生臭く汚い物を大事にしてそれで満足しておられます。)などと相手が攻撃に用いた低次元の言葉を使つたりしながら切り返しておいたあと、比喩を用いて次のように批判する。

沈牛跡之泥薄

其陋可愧
樞河漢之無根

(牛の足跡を没する程度の水たまりの深さにも沈んでしまうのに、天の河に岸がないのを怒つておられるようです。その卑しむべきことは大いに恥ずべきで、そのことは悲しむべきことです。)

以上が阮籍の返書の大要であるが、前章までに確認しておいた伏羲の書がもつIからIVまでの特色と對應させながら考へてみたい。

阮籍はまるで二者擇一などないかのように、小さな存在の愚かしさ、次元の低さを、「吾が眞」から見て厳しく批判する。しかしながら、その自己主張の根底にあるのは、個々に存在するものの價値の相對性である。「好尚好み外外に異にする」としておいた上で二項對立的に大きい存在と小さい存在とを提示するのだが、その發言の基底には、大きい存在には大きい存在の意味があり、小さい存在には小さい存在の意味がある、それぞれの存在にはそれぞれに次元を異にする生の姿があるのだとする相對的價値觀が横たわっている。基本的には二項對立的に生き方を提示し、その片方の存在の根底まで否定しているわけではないのである。これは伏羲の書簡が相對的な生の可能性を二項對立的に述べながら、その二項のいずれにおいても成立しないとして、結果としては一元的な生を強く押しつけたのとはまったく對照的である。阮籍の場合は、伏羲とは正反対に、一元的な生しか認めないかのようでいて、しかし伏羲には伏羲の、自分には自分の生き方があると言つて、相手に向き合っているのである。もちろん、自己の思想を問題にする場合、つまり自己に向き合うときには、唯一無二の價値ある生を求めていた。それは伏羲のIIの特徴としてみたすべてを名利に收斂させる低次元の處世觀と比べて大きな違いで、思想を問題にしている。第二段落で價値の相對性を述べておいた上で、さらに次の第三段落で自己の理想とする大きな生を強調するのはそのためである。もちろん自己自身が絶對的な生を志向することと、對他的な次元にあって相對的な價値觀を表明していることは論理として矛盾はしない。

次に注目すべきは、阮籍の返書では名利の生をめぐって論争もしないし、また時代認識についても發言しない點である。伏羲は善意からの忠告なのだと當てつけがましく、名利の生しかないのだと押しつける。その場合、低劣な處世認識の押しつけであり、また時代權力を背景にした押しつけなのだが、その點に關して阮籍は決して口にしていないのである。

もちろん自己表現の場では阮籍は「名利」の生を輕蔑する。たとえば「詠懷」その二十八では、

繫累名利場　名利の場に繫累せらるれば
鴛駿同一軸　鴛も駿も一軸を同じくす

といふ、「達莊論」でも

是以名利之塗開、則忠信之誠薄、是非之辭著、則醇厚之情樂也。

是以名利之塗開ければ、則ち忠信の誠薄く、是非の辭著るれば、則ち醇厚の情樂也。

と言つて拒絕するのが阮籍である。⁽⁷⁾しかし返書では、名利の生しかないのだとする伏羲に對して反論しない。全體では結果として大いなる反論に

はなつてゐるのはいうまでもないのだが、直接的には一言も觸れないものである。

また、阮籍は時代認識を語らない。今は大變よき時代で、「國寶」が時代を支えている、情況はその國寶を輔佐する「長籌の士」を求めてゐる、もっと積極的に時代と關われと伏義は言う。そして最終的に、どちらかはつきりとわたしに答えるとまで詰め寄つてゐた。しかし、なぜにそのようすに攻撃を受ける生を敢えて貫くのか、その處世の根底にある現狀認識を阮籍は返書の中で決して言わない。阮籍は「時事を評論せざる」を徹底し、一般的・普遍的に天地の外に精神を遊ばせる生を言い、肉體をこの方内に寄せてゐるに過ぎないので無名でもいいのだとするばかりである。

この二點に關して阮籍がコメントを避けてゐることは、現實の處世で問題にされる「至慎」の現れにほかならない、という點を強調すべきであると筆者は考える。たしかにこの返書では現實の生の「白眼」と同じ激しさが見える。⁽⁹⁾見てきたように阮籍は次元の違う相手には推し量れはしないのだとし、比喩を多用して發想大きく、小ものの勘ぐりをまるで相手にしていない。若いころ有力者の蔣濟からの出仕勧誘の時に、それを拒否した口實に德無く、任に堪えず、病がちとしたのとはだいぶ差がある。その「奏記詣太尉蔣濟」⁽¹⁰⁾（『文選』作「詣蔣公」）と比べ、なるほどこの返書では存分に伏義を小ものとみなして輕蔑している。しかし議論の上では伏義が提出した生き方と時代認識に對して發言することを明らかに避け、相手と直接的に向かい合つて反論しようとはしていないので。ホルツマン氏も返書では「玄遠」の言葉を用い、伏義の質問に答えていな⁽¹¹⁾いと言う。錢鍾書氏の「避而未對、徒以大言爲遁詞」とする短い論評も、同様のことと言うのである。

この返書に見える「至慎」はそれとどまらない。見てきたように、白眼視しながらも相手の立場はそれはそれとして認める見解を自己の發想に内包させていたということは、論としての周到さを持つていたということである。次元の違うところで生きている相手の存在自體を論理の上で決して抹殺するわけではない。伏義と自分は好みが違うと言つてゐるだけなのであるから、論理として相手の存在を許容する餘地を殘してゐる。阮籍のここでの發言は、白眼の現實行動ほどには激しくなく、また「達莊論」などで展開する思想營爲ほどには厳しい論理ではないのである。

以上のように、この返書の中に「白眼」だけでなく、態度や言説や論理としての「至慎」をも見るべきであろう。「至慎」の實態を示す内側からの資料として十分に讀めるのである。自己の思想を十全に語り、自己の倫理は貫いてゐる、それでいて同時に至慎を徹底してゐるのである。これからは、現實を生きる上で「至慎」には抵抗という面もあつたことが見てとれるだろう。

さらに阮籍の返書で特徴的なのは、發想の大きな比喩を多用してゐる點である。中嶋千秋氏も「その文章は、伏義の懇切で具體的、委細を盡くしたものに對して、意外にも修飾と比喩に満ちたものである。」⁽¹²⁾ といふ。莊子的な世界を強調するためのものであり、次元が違うもつと發想の大いな世界で生きているということを強く印象づけるのだが、ただ相手への攻撃の比喩としては前に引用した「牛跡の泥薄に沈む」と、よく知られ

た「大人先生傳」の「禪中の羣虱」と言ってのけた痛罵の比喩とを比べてみただけでも、迫力ある痛快さは比べものにならないことがすぐに見てとれる。「達莊論」の「雄桀なるもの」への完膚無きまでの切り捨ても同じで、「それらの作品にあっては胸のすぐ俗人批判がバネになってその先に逞しい思想が語られることになるのだが、この返書ではそれが抑えられていて、ここにも至慎のすがたがある。

ところで、字數が極端に少ないととも關係があるうが、それにしても阮籍は伏義に比べ執拗でない。至慎を方法とするためであることのほかに、このときの阮籍の氣分も影響していたと推測するのも無意味ではないだろう。伏義は阮籍にとって自己の思想を試されるような存在、對峙することによって自己自身の思想を深めるような固有の他者とは言えない。したがって、低次元の當爲の生を標榜して自己を詰問する俗物に對して、真っ向から反論することによってカタルシスが得られる、といった表現の營みというものではない。批判し唾棄することで事足れりとするような脆弱な思想、停滞した思想からは遠かつた。なるほど傳記では白眼でカタルシスを得たかにも見える。また作品で胸のすぐ俗人批判がなされ、思想を深める大きなバネになった。それらに對してこの返書にはそれが薄く、自己の倫理を貫きながらも至慎の態度を崩さない。と同時に、こういう情況に身をさらさなければならず、返書を書かないわけにはいかないといいうんざりとした氣分の中に阮籍はいた、まともに表現として應接する意欲がそれほどわからないということもあつたのではないだろうか。阮籍は觀念的・思想的には乗り越えてしまつて対象に向けて言葉を持たない。明らかに思想次元では自己の優位は絶對的であるから。しかし現實の情況のまつただ中にあつては強いられた生でしかない。自己は終始風景として視られる存在でしかない。この二重の構造の中で返事を書かされているのである。

したがつて阮籍の伏義とのやりとりは、「達莊論」や「大人先生傳」と比べて、そこにおいては一義的には作品であること、思想的營みであることをむしろ拒絕しているといつてもよいと思われる。阮籍がこのような緊張した情況のただ中にそのときおかれていったという紛れもない事實を、この往返書簡を読むものが知らされるような性質の最適な資料なのである。そしてそのような情況の中にいる阮籍を知ることが阮籍文學の成立の契機を理解する前提としてあり、そこを基點として、ここから阮籍の文學の營みの全體像がかいま見られるのである。本論のまとめとして次にこれらのことについての見通しを述べておこう。

五 往返書簡の意味するもの

往返二書の存在によつて、阮籍が生きた情況の難しさの實態を、あますことなく阮籍の外側と内側とから知ることができる。體制の側から阮籍

に對してどのような論理と根據とを持つて攻撃を加えたか。それに對して「阮籍はどのような論理と言説で現實の情況に應對したか」。

伏義の書は、阮籍を攻撃する體制側の似非論理と詐術としてのレトリック、及び低次元の處世觀と厳しい時代認識、その押しつけの執拗さ、恐ろしさを、十分に表現している。それらを當たり前のように成り立たせる權力の絶大さばかりがのしかかる。傳記資料にある現實の鍾會とか何曾とかの禮法の士たちの精神のありようをもその内側から傳えていた。つまりは彼ら體制側の輿論づくりのための論理と思想彈壓の强行とが書かせたのである。

一方、阮籍の返書も情況を生きる生のまたない資料になつていて、阮籍の現實の生の實態と苦惱を內的な事實として傳えてくれている。「白眼」と「至慎」の處世を共存させながら、苛酷で押しつけがましい情況を生きさせられている、その苦しみの容量と、にもかかわらず終始譲らない倫理・思想とをそこから読みとらねばならない。公にはできるだけ關わりたくない、答えたくない、しかし關わらざるを得ない、答えるざるを得ない。同時に、言葉で關わる以上は最低限のぎりぎりの自己の信念・倫理を徹底させていたのである。

要するに兩者による往返書簡は、阮籍と彼のおかれていた危險な政治情況との關係の實態を示す第一次資料なのである。これがこの往返書簡が存在する現實的・情況的な意味であるのだが、もちろんそれとどまるものではない。文學的・表現論的な意味もまた大きいと言わねばならない。このことをめぐっては別稿を用意するが、今簡単に触れておきたい。

阮籍と嵇康の文學性をどこに認めるかについては、「阮籍・嵇康の生と文學」で論じた。⁽¹⁵⁾ すなわち、言動次元の矯激の生の文學性が第一點。多様な文體による表現次元へと自己を押し上げていく文學性が第二點。そして今、この往返書簡の存在から、阮籍の文學性の視野を的確に持つことができるのである。

情況から表現へと押し上げていく個々の作品の現場を、多様な文體と方法とに即して分析していくことによってこそ、阮籍の文學の全體像とその營みの意味するものが鮮やかに見えてくる、と筆者は考えている。そういう觀點からまづは本論で、情況と對峙することを強いられるへ現在へを、阮籍の外側と内側とから見ておいた。それは情況の欺瞞性を結果として露にしたと言える。その衝突の先に、では阮籍はどのような場へと出ようとするのか。出てしまうのか。その場合、どこに自己を自己として認めるのか、どのような營爲を自己が自己である營爲として名指しするのか、が問題である。答えはもちろん、表現者としての自己以外に第一義的な自己でありえようはずもなく、また自己はそのような營み以外に接近することもできないし、深められもしないのである。たとえそれが幻想にすぎないとしても、そのような幻想を假構の中で生きること、それが阮籍を文學者たらしめているのだと言わなければならない。

阮籍の「達莊論」及び「大人先生傳」には虚構による文學と思想の深まりが顯著であるが、それらはこの往返書簡をふまえて成立した假構であつたと言える。この二書の存在から兩作品を考えていくことによつて、情況を生きる」とから、さらに假構がどのように成立するのか、という表現へと押し上げていく實態を確認することができる。つまりこの往返書簡は、假構を必然とする表現の契機の何よりの資料・現場を提供してくれるものである、と筆者は考えるのである。

注

- (1) 阮籍「答伏羲書」については、陳伯君氏の簡単な注（『阮籍集校注』中華書局 一九八七年一〇月）、及び Donald HOIZMAN 氏による全文の英譯（“Poetry and Politics” Cambridge University Press 1976 八五—八七頁）がある。とくに後者は参考となる。また最近、韓格平氏による譯注が出了た（『竹林七賢詩文全集譯注』吉林文史出版社 一九九七年一月）。伏羲「與阮籍書」については韓格平氏のよく簡単な注があるだけで、管見の及ぶ限り譯するものはないようだ。なお、本論に引用した本文は『阮籍集』（上海古籍出版社 一九七八年五月）によつた。
- (2) ホルツマン氏も、伏という姓は珍しいので、琅邪東武の伏氏に連なる者であろうと推測する（注①前掲書八一頁参照）。『後漢書』伏湛傳には、前漢・武帝のとき伏孺（湛の高祖父）が東武に家するようになったこと、「伏生（湛の九世祖）」より「後、世よ經學を傳へ」たとある。のち獻帝の皇后伏氏が曹操に廢され殺されたとき、父の完及び宗族數百人が連坐したところ（『三國志・魏書』武帝紀注引『曹瞞傳』）ので、この一族にとって魏王室への怨念は並でないはずである。
- (3) 清水茂「正始の文章」は、正始派（政治的な行動をとる人が多い）と竹林派（非政治的な態度の人）とに分け、前者は駢文への志向が少なく、後者はその逆であるとする（『小尾博士古稀記念中國學論集』汲古書院 一九八三年一〇月）。政治的ということと言えば伏羲は前者に属することになり、對偶に限つてもなるほど伏羲の書の對偶率は五六・一%で、阮籍の書の對偶率は七五・五%である。しかしながら伏羲の駢散兼行の文章を考えると、對偶に限つても偶表現の效力、さらには次におく直接的言辭による強烈な阮籍批判への展開の効果が顯著であり、やはり駢文への志向が強い文章というべきものである。
- また民國・劉師培『中國中古文學史』（一九一七年原印 人民文學出版社 一九八四年五月版）四八頁には、魏晉の文章の中で阮籍の文體に近いものとして舉げる四篇の一つに伏羲の書を含めているが、それを指摘するだけでどの點に關しての「相近者」なのか、眞意をばかりがいのは殘念である。
- (4) 「何曾嘗謂阮籍曰、卿恣情任性、敗俗之人也、今忠賢執政、綜核名實、若卿之徒、何可長也。」（『世說新語』任誕篇注引干寶『晉紀』）
「鍾會庭論康曰、今皇道開明、四海風靡、邊鄙無詭隨之民、街巷無異口之議、而康上不臣天子、下不事王侯、輕時傲世、不爲物用、無益於今、有敗於俗。」
- (5) 大上「阮籍詠懷詩試論——表現構造にみる詩人の敗北性について——」（『漢文學會會報』第三六號 一九七七年六月）参照。
- (6) 『三國志・魏書』鍾會傳にくわしい。とくに鍾會は、諸葛誕の亂鎮壓後、時人から籌策に長けた前漢の張良に比せられている。
- (7) その他、「大人先生傳」にも「夫世之名利、胡足以累之哉（夫れ世の名利なるもの、胡そ以て之を累はするに足らんや）」ともいふ。
- (8) 「上（司馬昭）曰、（眾）然天下之至慎者、其惟阮嗣宗乎、每與之言、言及玄遠、而未嘗評論時事、臧否人物、眞可謂至慎矣。」
- （李秉「家誠」）（『三國志・魏書』李通傳注引王隱『晉書』）

- (9) たとえば、注①陳伯君前掲書では「此書辭氣頗爲傲慢、對伏羲似極輕視、與其作白眼之態度正復相同。」(七三頁) という。
- (10) 「籍無鄉ト之德、而有其陋。猥見採擢、無以稱當。(署) 負薪疲病、足力不強、補吏之召、非所克堪。」(籍は鄉トの德無くして、其の陋有り。猥りに採擢さるるも、以て稱當する無し。(署) 負薪疲病して、足力強からず。吏に補するの召は、克く堪る所に非ず。)
- (11) 注①前掲書八七頁参照。
- (12) 『管錐編』第三册(中華書局 一九八六年六月第一版) 一〇八三頁参照。
- (13) 「張華の『鶴鳩の賦』について」(『支那學研究』第三號 一九六六年一〇月) 參照。
- (14) 大上「『達莊論』と『大人先生傳』」(青山學院大學綜合研究所人文學研究センター研究叢書第一三號『比較物語研究』所收 一九九九年三月) 參照。
- (15) 『青山語文』第一六號(一九九六年三月) 參照。

(一九九八年三月稿)